岐阜大学附属小学校５年生「みのり」学習 (総合的学習) の効果に関する研究

井戸田友博（津島市立神島田小学校）
橘　　良治（教職実践開発専攻）

On the effects of comprehensive learning in the case of attached primary school of Gifu University

1. 総合的学習の時間と教育心理学的視点

総合的な学習の時間は，体験的な学習や問題解決型の学習を通して，自ら学び考える力，学び方や考え方，主体的・創造的な態度，生き方の自覚等を育成し，知の統合化を図ることがねらいとされる。ここには，ソーシャルスキルや社会性の発達といった心理学的概念も深く関わってくる。荒木ら(2000) は，教育心理学的側面から総合的な学習に関わる知識や能力，態度について検討することで，「生きる力」の育成を目指す教育心理学の関わりを提言している。

⑴ 豊かな心を育てる立場から

総合的な学習に期待するのは，子どもの社会性を向上させることである。現代の児童はソーシャルスキルを獲得する上での指示・知識・体験を多く与えられているが，スキルを実行に移す機会が少なく，体験の結果を経験にまで高めるフィードバックも不足している。総合的な学習が成立するために，他者との相互作用の中で，自己が他者から受け入れられる体験が準備されなければならない。それによって，学習過程の中で自己理解や他者理解を深める機会を与え，自己開示の機会を与える。それを繰り返し体験させる構造が作り出せれば，スキルを実行に移す機会は増大し，児童のソーシャルスキルを生活の中で運用できるところにまで高めていくことに繋がる。また，総合的な学習の場で起こる対人的な問題解決場面を大切にすることで，このような場面を解決していく道筋や手法を学ぶ機会を提供できる。

このように，総合的な学習はその構造から，児童のソーシャルスキルを高めることが期待できる。

⑵ 個性表現・創造性育成の立場から

総合的な学習の中心目標である「生きる力の育成」には２つの側面がある。１つは気力・体力・忍耐力・持久力といった動物として生きる力，もう1つは人間としてよりよく生きる力である。特に後者においては，着想力・企画力・問題解決力といった認知的能力や共感・思いやりといった「対人関係能力」と共に，その人らしいやり方で問題を設定し，個性的に問題を解決する「創造性」といったものが含まれるだろう。総合的な学習の時間において創造性を育成するには，以下のようなステップや探求・準備・配慮が必要である。

① 創造性が非常に大切なことを生徒・教師が理解する。
② 創造性に関する知識・価値・意味を習得する。
③ 教師が創造性を高める技法を習得する。
④ 生徒の創造的態度をほめる。
⑤ 総合的な学習の時間の創造的活動を計画させる
⑥ 創造的活動およびその結果について，父兄や第三者の前での発表の機会を設け，創造性を伸ばす方向での評価と賞賛の機会を与える。
⑦ 未来に向かって，さらに探求することを勧める。
⑧ 教師が創造的教育活動を行う。

日本の学校に幅広く見られる，教科書の内容を学ぶことのみが重要であるのではなく，個人の個性

や創造性を生かした活動を総合的な学習の時間に取り入れることで，創造性は育成することができる。

桜井 (1997) は学習意欲の観点から，内発的な学習意欲は，有能感・自己決定感・他者受容感(「他者から受容されていると感じること」を意味する)の3種類の要素から成り立っているとする。活動の中でそれらの感情を強く感じることにより，学習活動などに対して積極的に関わっていくことができるようになる。また，活動を通して楽しさや満足感が得られれば，より積極的に活動へ関わろうとする学習意欲の源となる。例えば，他者受容を感じることで「自分もやればできる」と有能感を感じ，「次も頑張ってみよう」という自己決定感に繋がる。つまり，活動により他者から認められ受け入れられる体験が，有能感と同様に自尊感情も高め，より積極的に活動へ関わろうとすることにつながる。つまり学習や活動を通して他の児童や教師から感謝されることが，学習及び活動への積極性を増したり自尊感情を高めたりすると考えられる。

2. 岐阜大学附属小学校の総合的な学習の時間

附属小学校の総合的な学習の時間では，「経営活動」を中心として学習が行われている。ここで言う「経営活動」とは，各学年にそれぞれ決められたテーマに応じて学級ごとに総合的な学習の時間を中心にして児童が主体として行われる活動のことを言う。その重点は，「経営活動における日常的・継続的な活動の中から，自ら問題を見つけることができる子の育成」である。附属小学校の実践は，経営活動における日常的・継続的な活動と総合的な学習の時間の２本柱から構築されている。前者は，日常的・継続的な経営活動を通して導き出される問題を明らかにする側面，後者は，総合的な学習の時間の中で経営活動を行っていく上で解決すべき問題について考える側面である。更に，こうした問題はどのように解決できるかを考え，それを実際に実行できる能力の育成に焦点をあて実践を行ってきた。

この観点に沿って総合的な学習の時間において求められる児童像が4点挙げられている。

* 「具体的な活動の中から自分の願いや課題を導き出す姿」
* 「課題解決に向けて，手足や五感を働かせ，生活経験や既習内容を役立てながら追求する姿」
* 「根拠を明らかにした振り返りから新たな問題を見つけ，よりよい解決に向けて自ら学び続ける姿」
* 「自分の学びをまとめ，周りの人へ発信する姿」

これまでの実践においても，経営活動を充実させていく中で生まれる問題を自ら見つけ解決することから，更に新たな活動を生み出す学びへの取り組みが行われてきた。総合的な学習の時間における問題解決の学びに関して学級間の共通理解の指針が示されている。

1. 自分の課題：総合的な学習の時間は，児童一人一人が自分で導き出した学習を追究していく学習である。
2. 自分の追究：総合的な学習の時間は，強化や領域の枠組みにこだわることなく，一人の児童の中にある「知」を統合していく学習である。
3. 自分で評価：総合的な学習の時間は，常に自分の学びの様相を見つめ，その過程で生じた課題や成果を，次の学習へ発展させていく学習である。
4. 自分への責任：総合的な学習の時間は，「学習の主体者は，自分である」という意識改革を児童の内面から呼び起こし，自覚する学習である。

本年度においても，過去の実践の成果に基づき，評価や改善を行いながら，総合的な学習の時間が，「一人一人の学びとして成立している」姿を目指して実践および指導が行われている。

学習内容は，低学年・中学年・高学年のそれぞれの段階によって異なり，学年によってもテーマは異なる。

低学年では，１年生が「遊び」を，2年生が「野菜栽培」をテーマとした経営活動を行っており，「めぶき」学習と名づけられている。「遊び」を中核とした経営活動に取り組む中で，自分の生活や身の回りの事物・事象に関心を持ち，季節による変化とそれに伴う自分の生活の変化に気付き，自分の

生活を工夫することが内容の力点となっている。また，本年度は生活科の学習の発展としてのとらえ方がされている。

中学年では，３年生が「花」，４年生が「動物」をテーマとした経営活動を行っており，「わかば」学習という名で時間が設定されている。内容の力点は，「労働」を中核とした経営活動に取り組む中で，動植物の特徴や自然環境とのかかわりへの認識，生命に対する尊厳を深めること。そして，自分の生活や身の回りの事物・事象のあることに気付き，そのことに関心を持つとともに，自分の生活を工夫することにある。

高学年では，５年生が「健康・情報・環境」，６年生が「メディア」をテーマに経営活動を行っており，「みのり」学習として時間が作られている。その重点は，「奉仕」を中核とした経営活動に取り組む中で，自分の興味・関心を基に，自然環境と人間の生活・文化とのかかわりや他の地域や国々の人々の生活及び事物・事象の特質などを，自分なりの視点で考え，その結果を生かした生活のあり方を工夫し，仲間に発信することにある。高学年の経営活動は学級の2人1組が別の学年・学級へ担当者として入ることになっている。例えば，５年１組のある２人は１年１組へ，別の２人は２年２組へ，という具合である。そこで各学級のテーマに応じた「奉仕」に関わる活動を行うことで，学習及び活動の重点ポイントを捉えていく。

本研究で取り上げる５年生の「みのり」学習では上述した通り，奉仕活動を中心とした「生き方」がテーマとなっている。経営活動の内容は学級により異なり，本年度では５年１組が「美化環境経営」，５年２組が「情報図書経営」，そして５年３組が「スポーツ健康経営」という名称の経営活動を行ってきた。以下に今年度に行われた具体的な学習及び活動を述べる。

５年１組は美化環境経営を行っている。美化環境経営は主に学校内の美化および環境に関する経営活動を行っている。「みのり」の時間では，年度の初めに，掃除をすると何故よいのか，掃除をすることの値打ちとは何かについて話し合い，「よい環境をつくる」とはどのようなことをすることかについて協議する時間もあった。更にそれを踏まえた経営活動を行った。具体的な経営活動の一つが「交流掃除」である。これは，学級の２人がそれぞれの担当学級で掃除の時間に一緒に掃除をして，掃除の手法を伝えるだけではなく，掃除をすることがどれ程よいことなのか，掃除をすることの値打ちは何なのかを知ってもらうという活動である。交流掃除の機会は週ごとに異なるが，平均で週２～３回である。学校行事として行われる大掃除の時に各学級や学校全体で活躍するのも５年１組である。他の日常的な経営活動では，学校内で出た落し物を管理したり連絡したりする活動や，トイレのスリッパを毎日チェックして綺麗に並んでいないようなら綺麗に整えるという活動も行っている。また，10月頃から校庭の落ち葉拾いを行ったり，大イチョウの木の世話（周辺の土を耕す，水をやるなど）を行ったりした。

５年２組の情報図書経営では，主に学校の図書館の利用や児童の読書に関する活動を行っている。具体的な活動内容として，朝の会前の時間に行われる「読書タイム」が挙げられる。これは学級の２名がそれぞれの担当学級で読書活動を進めるもので，基本的に週1回行われるが，雨天時に行われることもある。その際に，時間内の学級の姿を反省として担当学級で共有したり，担当学級の児童が持ってきてほしい本を聞き，次回の活動時に図書館から借り出してきたりする。低学年の読書タイムでは紙芝居が行なわれている。また，図書館の蔵書の中にある特定の本をピックアップして内容や面白い所を特集したものを学校内に掲示して，本に興味を持ってもらう活動も行っている。それらの掲示物の作成に「みのり」の時間が当てられることもある。他には，20分休みや昼休みといった休み時間に紙芝居を行ったり，図書館の本の紹介や図書館利用に関するキャンペーンを行ったりもした。後者の例として，12月には「図書館祭り」というものが行われた。これは，期間中に図書館の本を一定数借りて読んだ場合に，しおりなどのプレゼントが貰えるという企画である。図書館の本に興味を持ってもらったり，図書館に足を運んでもらう機会を増やしたりするために行われた。このように担当学級の活動だけではなく，学校全体へ働きかける活動も行われた。

５年３組のスポーツ健康経営は，学校での生活が心身ともに健康であることを目指す活動だが，他

の学級とは経営活動の形態が異なる。スポーツ健康経営の主な経営活動は朝のスポーツ活動である。これは５年３組が企画した体を動かす活動を学校の児童全員が外に出て行うものであり，それぞれの担当学級で行われるものもあるが，基本的に学校の児童全員を対象としている。本年度は，児童全員で遊ぶことができる「三色おに」，学級ごとに競技形式で行う「大縄跳び」，雨天時室内でも行うことのできる「ストレッチ」が時期ごとに行われてきた。また，11月頃からは「にこにこランド」という新しい活動が始まった。これは，グラウンド全体を使い，十数種類の活動がアトラクション形式でできるスポーツ活動で，児童は自分の好きな所でスポーツ活動を楽しみ，あらかじめ渡されているスタンプ帳にスタンプを押してもらいながら回っていく。具体的な活動の内容は，ダンス・バスケットボール・縄跳び・綱引き・シャトルラン・キャタピラ(筒状のダンボールに入り，中で動きながら前に進んでいく)等，多岐に渡っている。スポーツ健康経営はスポーツ活動だけを行っているのではない。それぞれの担当学級に対して，病気予防のための呼びかけや掲示が行われた。本年度は特に新型インフルエンザが流行したことから，手洗い・うがい・換気といった予防活動を徹底しようとした。

3. 目的と方法

本研究の目的は，総合的な学習の心理学的効果について，質問紙によって明らかにする客観的な側面と，実際に学習・活動に対し観察や参加を行った結果についての主観的な側面から検証することにある。これらを通じて，よりよいみのり学習及び経営活動への方策を考察していく。方法については以下の通りである。

(1) 質問紙調査

① 対象

附属小学校５年生119名（１組40名，２組39名，３組40名）

② 質問の項目と内容

用いた尺度とその内容は桜井(1983) 及び中谷 (1977) を基軸に構成した。(表１参照)

＊　児童用コンピテンス尺度

「自分に自信がある」「自分には上手くできるものがある」といった，主に自尊感情に関わる質問項目で６項目からなっている。仮説から，みのり学習及び経営活動が自尊感情に影響すると考えられたため，この尺度を構成した。

＊　社会的責任目標尺度 (向社会的目標)

「友達から頼まれたことをやってあげる」「困っている人がいたら助ける」といった，向社会的な行動に関する質問項目で，８項目からなっている。自尊感情の高まりが，よりよい行動を取ることに繋がるだろうという考えからこの尺度を構成した。

＊　社会的責任目標尺度 (規範遵守目標)

「先生の話は聞く」「クラス内での自分の仕事はしっかりこなす」といった，主に学級内でのルールを守ることに関する質問項目で，６項目からなっている。尺度の構成理由は同尺度の向社会的目標項目と同じである。

＊　経営活動に対する意識尺度

「担当クラスに積極的に関わっている」「自分は経営活動を頑張っている」といった，経営活動への意識について尋ねる項目で，５項目と自由記述項目からなっている。今回新たに作成した質問項目であり，自己決定感の高まりが経営活動への積極性や意識の高まりに繋がると考えた。

③ アンケート実施

４月 (先行調査)，７月 (本調査)，12月 (本調査・追加調査)

④ 追加調査について

12月のアンケート調査実施後に付加的調査を実施した。他者から受容される体験が上述した尺度と関連性があるかの検討が目的である。内容は「経営活動を行ってきて経営活動先 (担当学級など) の児童や教師に受容される体験があったか」を尋ねた。「経営活動先の児童は自分の言ったことを聞い

てくれているか」「先生に感謝されたことはあるか」といった４項目の質問に対し，その頻度を「あまりない」「たまにある」「よくある」「いつもある」の４件法で回答を求めた。

(2) 観察調査

みのりの時間や経営活動時における具体的な学習内容・活動内容及び担任教師の指導について観察を行った。期間は2009年５月から2010年１月の間である。観察の際には，実際に学級に入ったり活動に参加したりして観察を行った。また，声かけや一緒に活動を行うといった児童と関わりを持つ際には，自分なりに接し方を考えてみのり学習や経営活動を行う児童と関わった。

表１．各尺度の具体的な項目内容

児童用コンピテンス尺度 1「今の自分に満足している」 2「自分の意見は自信を持って言える」 3「自分には，人に自慢できるところがたくさんある」 4「失敗をするのではないかといつも心配している(逆転項目)」 5「自分に自信がある」 6「人よりうまくできるものがある」
社会的責任目標尺度【向社会的目標】 1「鉛筆や消しゴムを忘れた人には，自分のものを貸してあげている」 2「友達から何かを頼まれたら，それをやってあげている」 3「年下の子の世話をしてあげている」 4「困っている人を見かけたら，手伝ってあげている」 5「教科書を忘れた人がいたら，自分のものを見せてあげている」 6「落ち込んでいる人がいたら，なぐさめたり，はげましたりしてあげる」 7「けがをしたり，具合の悪い人がいたら，保健室に連れて行ってあげる」 8「お年寄りの人には親切にしてあげている」
社会的責任目標尺度【規範遵守目標】 1「友達としゃべりたくなっても，授業中は我慢している」 2「クラスで自分が受け持ったことは，しっかりやっている」 3「人の悪口を言わない」 4「授業中に疲れてきても，授業が終わるまで先生の話をよく聞いている」 5「当番の仕事は，たとえ面倒でも，それをしっかりやっている」 6「先生にやるように言われたことは，面倒でもしっかりとやる」
経営活動に対する意識尺度 1「積極的に担当のクラスの子にかかわっている」 2「担当のクラスのことを考えて行動している」 3「担当のクラスの子が話を聞いてくれるような工夫をしている」 4「これまで自分はとてもがんばっていたと思う」 5「昨年の５年生と比べて，自分も経営活動がしっかりできていると思う」 6「今の経営活動について思ったり感じたりすることを自由に書いてください」

4. 結果と考察

まず，４月に行った先行調査の結果を示す。４月時点の４尺度得点の平均及び標準偏差は表２の通りであった。

この調査における各項目の天井効果（平均と標準偏差の和が得点の最大値を上回っており，得点分布が高い方に歪んでいる場合を指し，試行を重ねても得点がそれ以上伸びないとされる頭打ち状態をいう)について調べた所，25項目中19項目に天井効果が確認された。特に向社会的行動や規範意識の項目について，14項目中13項目について天井効果があるという結果となり，９割以上の児童が肯定的な回答をしていた。このように，「困っている人がいた場合は助けるべき」「授業時間中は先生の話を静かに聞かないといけない」といった意識は総じて非常に高い。しかし，たとえ意識が高くても，それを行動に移すことができていなければ，他者に対する意識や規範意識として定着しているとは必ずしも言えない。そのため，経営活動を通して行動面での影響があるかという観点からの質問にすべきであると判断した。そこで，この調査で用いた質問項目を，意識面での質問から行動面についての質問に変更して７月及び12月に再度調査を実施した。

表２．４月時点の各尺度の平均・標準偏差

	平均値	標準偏差
自尊感情	2.78	0.93
向社会的行動	3.57	0.66
規範意識	3.44	0.71
経営への意識	3.62	0.69

７月及び12月の質問紙調査の結果については，７月と12月の数値の変化を対応のあるt検定で検討した。また，被受容得点（活動先で自分が受け入れられているという本人の意識）について追加質問した。これを学級ごとに中央値により高群と低群の２つに分け，12月の自尊感情得点・向社会的行動得点・規範意識得点・経営活動への意識得点における差を従属変数として，対応のないt検定を用いて検討した。それが表３及び表４である。

表３．各クラス毎の７月と12月の平均及び差の検定

組	質問項目	７月	12月	t値(12月－７月)
1	自尊感情	3.83	4.25	2.86**
	向社会的行動	4.91	5.04	1.13
	規範意識	5.04	4.99	-0.33
	活動への意識	5.00	5.05	0.33
2	自尊感情	4.08	4.07	-0.10
	向社会的行動	5.11	4.82	-2.39*
	規範意識	4.74	4.66	-0.70
	活動への意識	5.02	4.67	-2.09*
3	自尊感情	3.57	3.88	2.23*
	向社会的行動	4.69	4.64	-0.33
	規範意識	4.30	4.48	1.16
	活動への意識	4.40	4.62	1.18

*:5%の有意水準　**:1%の有意水準

１組についての結果では，自尊感情得点について（t=2.86,df=34,p<.05）12月に有意に向上した。被受容得点高群においては，向社会的行動（t=3.34,df=33,p<.01），規範意識（t=2.13,df=35,p<.05），経営活動への意識（t=2.93,df=35,p<.01）においていずれも被受容得点低群に比べ有意に高いという結果を得た。

２組についての結果では，向社会的行動において（t=-2.39,df=32,p<.05），経営活動への意識において（t=-2.09,df=37, p<.05）で，12月にいずれも有意に低下するという結果を得た。また被受容得点高群においては，向社会的行動（t=2.82,df=36,p<.01），規範意識（t=2.62,df=34,p<.05），経営活動への意識（t=2.06,df=36,p<.05）となり，いずれも低群に比べ有意に高かった。

３組についての結果では，自尊感情について（t=2.23,df=34,p<.05）で12月に有意に向上した。被受容得点高群においては，経営活動への意識についてのみ（t=4.31,df=34,p<.01）で低群に比べ有意に高いという結果となった。

それぞれの学級において学習内容及び活動内容が異なるため，学級別での検討を行ったが，自尊感情を除いた３尺度については７月の時点で天井効果が確認されている質問項目も多く行動面についても７月の時点で既に非常に高い水準にあったといえる。

12月調査時の自由記述からは，共通して「よくない点を挙げるだけでなく，そこからどうしていきたいかという課題を捉えている」記述が増加しており，児童の課題意識が高まっていることが伺えた。

このことが，12月との変化について有意に向上することがなかったり逆に有意に低下という結果となったかもしれない。

表４．被受容得点での上位群・下位群の平均値の差の検定

組			平均	t値（上位－下位）
1	自尊感情	上位群	4.28	0.99
		下位群	3.99	
	向社会的行動	上位群	5.30	3.34**
		下位群	4.56	
	規範意識	上位群	5.04	2.13*
		下位群	4.42	
	経営への意識	上位群	5.38	2.93**
		下位群	4.44	
2	自尊感情	上位群	4.21	1.07
		下位群	3.83	
	向社会的行動	上位群	5.28	2.82**
		下位群	4.48	
	規範意識	上位群	5.07	2.62*
		下位群	4.31	
	経営への意識	上位群	5.07	2.06*
		下位群	4.35	
3	自尊感情	上位群	4.11	0.87
		下位群	3.79	
	向社会的行動	上位群	4.86	1.60
		下位群	4.43	
	規範意識	上位群	4.58	1.53
		下位群	4.15	
	経営への意識	上位群	5.07	4.31***
		下位群	4.03	

*:5%の有意水準　**:1%の有意水準 *:0.1%の有意水準

5. 実践を通して

観察調査時，児童の学習や活動に積極的に関わり，ほめたり共感したりする機会が多くなるよう意識的に行動してきた。

経営活動に関して，落ち葉拾いを一緒に行った際に，道具では拾いきれない細かい場所の落ち葉を，手が汚れることも厭わず頑張って拾っていた児童を素直にすごいと感じ，「簡単にできることじゃないよ，偉いね」と声をかけた。また，作業を行いながら何人かの児童と話をしていた時に，「寒いし大変だけど，綺麗になるのは嬉しい」という話が出たことがある。それに対して，「最近は寒くなってきたからね」「綺麗になったらまた頑張れるね」と共感的な立場で言葉を交わした。落ち葉拾いは十数分の作業だが，このような声かけや言葉のやり取りを意識して行った。みのり学習では，５月に「掃除の価値とは何か？」ということの話し合いから始まり，みのりの時間を使って校舎内の階段や廊下の掃除を行ったこともあった。10月頃からは2月のみのり発表会に向けてのテーマ決定やスケジュールの設定を児童がそれぞれ行っており，12月には環境新聞コンクールに参加する試みが行われた。その中で「こうしていきたい」という児童の考えを受容したり，悩んでいる児童に対しては同じ視点からどうすればいいのかを一緒に考えた。こうした行動が，児童に「先生は見てくれる，一緒になって頑張ってくれる」という形で伝わり，「もっと頑張りたい」という意識が生じたとの思いもある。

それが顕著に見られたのは年末の大掃除だった。美化環境経営を行っている5年1組がそれぞれの担当学級でリーダーシップを取って活動を行った。それぞれの学級を担当する児童が２回３回とワックスを取りに来た姿は非常に印象的であった。ワックスを重ねがけするということで，「担当クラスを少しでも綺麗にしてあげたい」「ここまで綺麗になることを知ってほしい」という思いを知り，５年１組の児童の思いやりの心や活動に対する意識の成長を実感できた。

6. みのり学習に関する考察

本研究の目的は５年生のみのり学習の効果について検証するとともに，心理学的な観点からよりよいみのり学習及び経営活動とは何かを考察することにある。これまでの結果から，みのり学習や経営活動を行うことで数値面での変化は学級ごとに異なった結果であったが，各学級で共通して学習・活動を通して，「どうしていけばよいか」「どうしたいか」という課題意識の向上が全体として共通に確認された。観察調査においても，自ら課題を見つけその解決のために積極的に動く姿は多く見られた。そこには自分に対する自信や他者に対する思いやりの心と，それらを実際に行動に移す力の高まりがみられた。

小林（2000）は「豊かな心を育てる」という観点から「総合的な学習が成立するために，他者との

相互作用の中で，自己が他者から受け入れられる体験が準備されなければならない」と述べており，本研究の結果を通して他者から受容される機会を得ることにより，自分や他者に対するポジティブな意識が高められることが明らかになった。こうしたことから，経営活動先で共通して他者から受容される機会が作れないだろうかと考える。具体的には，全学級の教師が自身の学級に担当として入ってきた児童を高く評価してあげる機会を作ることを共通認識として持つことができないだろうか。経営活動先の学年や児童によっては，上手く関わることのできない場面も出てくる。そこで，まずそれぞれの担任教師が率先して担当の児童を受容してやる。これについては，桜井 (1997) が述べている学習意欲を育てるための教師の手立てとして，「成功の経験を多く持たせること」「賞賛や期待を寄せること」「子どもの決定したことが上手く運ぶような支援やお膳立てを用意しておくこと」とあり，5年生の教師だけでなく，それぞれの担当学級の担任教師とこの意識を共有することで，よりよいみのり学習・経営活動になると思われる。

また，５年生における各学級の経営活動テーマに関して，予めどのようなことを取り上げるかを児童と担任教師が共有する必要があるように思われる。今年度の経営活動に関して言えば，２組の情報図書経営について２組の児童に話を聞いた時，主な活動が図書に関わる読書経営のみで，情報に関わる経営活動を行っていないことが児童の方で気になっていた。情報に関わることであれば，パソコンを用いた情報公開を行うことや，パソコン室の利用に関する経営活動を行うことが考えられる。今日，社会は情報化の一途を辿っている。溢れる情報の取捨選択，情報モラルなど多くの問題に子どもが直面している現在，情報に関わるみのり学習や経営活動についても何を行っていくか，児童と教師が共に考えて実行していけるとよい。

３組についても，朝のスポーツ活動が経営活動のほとんどとなっている現状で，「心と体を健康にする」という健康経営としての側面に弱さを感じた部分があった。児童の自由記述でも，「スポ活(スポーツ活動) 経営ではないので，換気や手洗いなどの呼びかけをもっとしていきたい」「本当に心も体も健康にしているのか」「手洗いうがいや換気の呼びかけをしても自分がやっていないので，そこを直したい」といったものがあった。健康に関する側面についての児童の課題意識についてもその高さを感じることができた。単に呼びかけや掲示物でのお知らせをするだけではなく，スポーツ活動のように日常的・継続的に行うことのできる活動を一緒に考えていくとよりよい学習や活動ができるのではないだろうか。

以上のように二点の改善点が示唆された。１点目は，児童の間で互いを受容できる機会を作るために担任教師が働きかけを行っていくという教師の橋渡し意識が必要ではないかと考える。５年生が働きかけを行なっても，担当学級の児童や担任教師がそれに対して反応しなければ，コミュニケーションとしては成立しないし，５年生も受け入れてもらえているのか分からず不安になる。そこで，まず担任教師が率先して５年生の働きかけに対し感謝したりほめたりと積極的に反応を示してやる。そして学級の児童に対しても，やってもらったことに対して感謝の反応ができるよう指導を行なっていく。２点目は，提供クラスの教師と児童が一緒になって経営活動のテーマに沿って取り上げるべき内容を共に考えていくという考えである。これら２点がみのり学習と経営活動を更に向上させるものであると確信する。

参考・引用文献

学校教育法施行規則
小学校学習指導要領　平成20年３月告示版　文部科学省
小学校学習指導要領解説(総合的な学習の時間編)　平成20年８月版　文部科学省
平成８年７月中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第一次答申
平成10年７月教育課程審議会答申

平成15年10月中央教育審議会「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」答申
平成20年１月中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申
(いずれも文部科学省ホームページより参照)
荒木紀幸・古川雅文・弓野憲一・淀澤勝治・田村浩司・古城和子・小林正幸 (1999).「総合的な学習で伸ばす知識，能力，態度は何か―総合的な学習と心理学の接点を探る―」. 日本教育心理学会総会発表論文集43巻 p12-13
荒木紀幸・古川雅文・弓野憲一・淀澤勝治・田村浩司・古城和子・小林正幸 (2000).「総合的な学習で伸ばす知識，能力，態度は何か―総合的な学習と心理学の接点を探る―」. 教育心理学年報39巻 p14
小石寛文 (2000).「小学生の異年齢集団活動が仲間関係に与える影響」. 日本教育心理学会総会発表論文集42巻 p448
桜井茂男 (1997).「学習意欲の心理学」. 誠信書房
桜井茂男 (1983).「認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成」. 教育心理学研究31巻 p245-249
桜井茂男　(1992).「小学校高学年生における自己意識の検討」. 実験社会心理学研究32巻 p85-94
中谷素之 (1997).「児童用社会的責任目標尺度の信頼性妥当性の検討」. 名古屋大学教育学部紀要，教育心理学科44巻 p221-227